

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 324



1998 NOVEMBER



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN ——— HAJ

1999年H A J 登山隊員募集

アルタイ(中国側)の最高峰へ行きましょう

中国、モンゴル、ロシア、カザフスタン四国にまたがる「アルタイ」山脈は、約2000kmにも及ぶ大山脈です。その最高峰はロシア側にあります。今回は、中国、モンゴル国境付近にそびえ立つ「友誼峰・4,374m」が目標です。モンゴル側では古くから「タバン・ボグド」と呼ばれ、その主峰は「フィティン・4,422m」とされています。

モンゴル側からは、何登もされている山ですが、中国側からは「未踏」です。かつて1988年に開高健が巨大魚を求めて探索した「ハナス湖」を船でわたり、更に奥に分け入りこの主峰を目指してみませんか。興味のある方は、H A J事務局へ連絡下さい。

記

1. 日 時：1999年7月24日(土)から28日間程度
2. 募集人数：約10名
3. 費用：65万円



引き続き募集中!!

カバン峰 (6,717m) 未踏峰

チョム・カンリ (7,048m)

ニンチン・カンサ (7,206m)

表紙写真

今から20年前の1978年6月14日カラコルムはバトゥラ山群の未踏峰ハチンダール・キッシュ (7,163m) の頂稜 (約6,250m) に飛び出すと、前方に憧れの頂上が意外に近くに聳え立っており、その美しさ厳しさに身の引き締る思いがした。写真はバルタール・ピーク。右のCOLでムチチュール・ピークとつながり双耳峰となっている。(山森 欣一)

ヒマラヤ No.324

1. 知られざる山々 四川省邛崃山系の岩峰群 中村 保
7. H A J サマー・キャンプ
四川の夏 ラモ・シェ (6,070m) 登山報告
17. ヒマラヤ・ニュース <地域ニュース・トピックス・Books・ヒマラヤから>
22. 未踏の頂に憧れて カバン (6,717m) 偵察計画
24. 寸感・事務局日誌

知られざる山々

四川省邛崃山系の岩峰群

中村 保

四姑娘山の北側に幾つもの未踏の山々があることは地図の上では分かっていたが、その姿を収めた写真を見たことがない。横断山脈の知られざる山々の探査に取り組む筆者にとって、いずれ足を踏み入れねばならない地域の一つであった。好都合にもアクセスは極めて便利なところで、限られた日数のなかで効率的に行動できる山域なので、今年の夏休みを利用して入域することにした。

7月末から8月上旬にかけての雨期にあたる時期のため多くを期待しないつもりで出かけたが、幸い「中村さんは晴れ男だ」と現地の人から言われているように、今回も天気には恵まれ、予想していた以上の成果を上げることができた。何しろ、キャラバンを始める9日間休みなく雨が降り続いたというから、ラッキーだった。

計画段階で旅のテーマを三つに絞った。

- (A) 山域の北側、理県から入って最高峰の5892m峰の姿をとらえる。
- (B) 山域を北から南に縦断する。具体的には竿棚溝をつめて4644mの峠を越えて長坪溝を下り日隆に出る。トレッキングのハイライトである。
- (C) 日隆から車で馬尔康に出て、さらに北上して羊拱山系の4450mの峠越えそして黒水県入り、長征の史跡と羌族の石碉の村を訪れる。

結果は、(A)は溪谷の増水で渡渉ができず中途で断念。(B)に日程とエネルギーを重点配分し所期の目的を達成することができた。(C)も予定どおりトレースしたが、山とは直接かかわりがなく、また特筆すべき遭遇や体験はなかったので本稿ではふれない。

(B)の竿棚溝から長坪溝へ抜ける行程は私にとって「小さなパイオニア・ワーク」とも言える充実したトレッキングであった。一つには私の知る限

り、この峠越えのルートは外国人はまだ誰も通っていないこと。後から分かったことだが、この道筋は交易路ではなく、ヤクの放牧か薬草採りの往来に使われる踏み後程度のもので、馬やロバが荷を運ぶ道ではない。キャラバンを組んで、私は馬に乗り、荷物は馬かロバに積んで移動する計画を押し進めたが、可成り無理をせざるを得なかった。

もう一つは、谷を取り巻く5500メートル前後の山々は、花崗岩の個性的な岩峰の連なりであり、次から次に現れる尖峰や重量感のある岩峰を我を忘れてシャッターを押し続けた。四姑娘山主峰と長坪溝をはさんで東側に対峙する神山（アメリカ人はセレスティアル・ピーク「天空の峰」と呼んでいる5413mの南から見ると円錐形の際立った有名な岩峰）に優るとも劣らないユニークな、クライマーにとっては垂涎のピークが居並んでいる。もし氷河が発達していたら、シャモニーの尖峰群やパタゴニアのパイネやフィッツロイ、セロ・トーレの岩峰群に匹敵するだろう、というのが私の印象である。写真をまとめたのでご覧いただければその一端をお分かりいただけると思う。

写真に撮ることができたのは、二つの溪谷の両側のピークのみで、幅広く東西に広がる山域全体では、(A)の5892m峰を筆頭に数多くの知られざる雪山、岩峰があり、規模は小さいが氷河や湖が点在している。いずれ近い将来再訪してみたい。

以下、情報として、日程、キャラバンの構成および費用について記し、ご参考に供したい。なお現地の手配は長年私が使って来た四川探検旅遊公司（成都）の張兄弟にまかせた。同行者はアメリカ人のガイドをしているベテランの中国人、四川・チベット辺境に精通している愛称「レニー」という御仁で、彼の機転と行動力、交渉力がトレッキングを成功に導いてくれた。

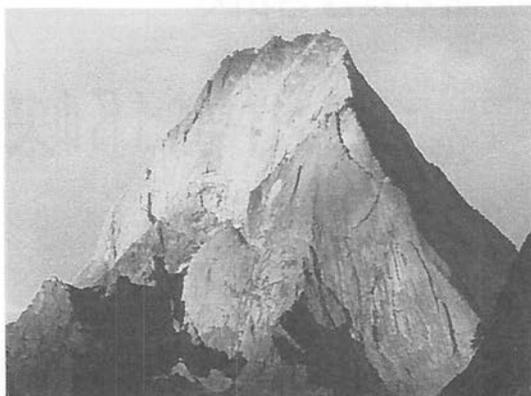
▼No.13 5592m峰



1) 日程 (1998年)

- 7月25日 東京 → 上海 → 成都。
 26日 成都 → 理県 (車)。
 27日 理県 → 5892m峰の北側の谷へ。車と徒歩。途中で引き返す。
 28日 理県 → 309林 → 竿棚溝へ → 牛肉棚子 → C1 (車)。車で馬1頭、ロバ4頭をC1に運ぶ。
 29日 C1 → C2。道案内のため樵を一人雇う。C1からトレッキング開始。C2は竿棚溝の源頭の下の方の放牧地。ここで薬草採りのチベット人をガイドとして雇う。
 30日 C2 → 4644mの峠 (竿棚溝と長坪溝の分水嶺) → C3。C3は長坪溝の源頭の放牧地。花崗岩の岩峰群に囲まれた美しい谷はフェリーランドである。
 31日 C3 → C4。長坪溝を下る。雨期で川沿いの平坦地は湿地帯になり馬とロバは難儀。何度も道を見失うが、薬草採りが上手にガイドしてくれる。
 8月1日 C4 → C5。C5は四姑娘山主峰北壁の下。ここまではツアーリストが登ってくる。
 2日 C5 → 日隆、キャラバン終了。
 3日 休養。
 4日 日隆 → 両河口 (長征の史跡) → 馬尔康 (車)。

▼No.18 神山 (5413m)



- 5日 馬尔康 → 4450mの峠 → 黒水 → 石碣楼 → 茂県 (車)。
 6日 茂県 → 成都 (車)。
 8日 成都 → 上海。
 9日 上海 → 東京。

トレッキング中の峠越えの急斜面の部分は、馬方が道を整備しながら進み、馬とロバにとっては危険で困難だったが、無事切り抜けることができた。

2) キャラバンの構成

- 日本人：中村保一名。
 ガイド：四川探検旅遊公司、漢族一名。
 馬方：理県の羌族二名。
 道案内：牛肉棚子の樵、羌族一名。

日隆の樟木寨に住む薬草採り、チベット族一名。

3) 費用 (東京-成都間の航空運賃を除く)

1. 管理費・整備・食糧 (12日間×\$60) 720
2. 車=トヨタランドクルーザー、運転手費用含む (1860km×\$0.6/km) 1116
3. 馬1頭、ロバ4頭 (\$10/日/頭×9日、帰路含む) 450
4. 馬方2名 (\$10/日/人×9日、帰路含む) 450
5. ホテル代 (飲食含む)
 - 成都・岷山飯店1泊 (中村) \$ 70
 - 成都・錦江飯店2泊 (中村) \$ 170
 - 理県政府招待所2泊3名 \$ 80
 - 馬尔康・アバ賓館1泊3名 \$ 40

茂県賓館 1泊3名

\$ 40

400

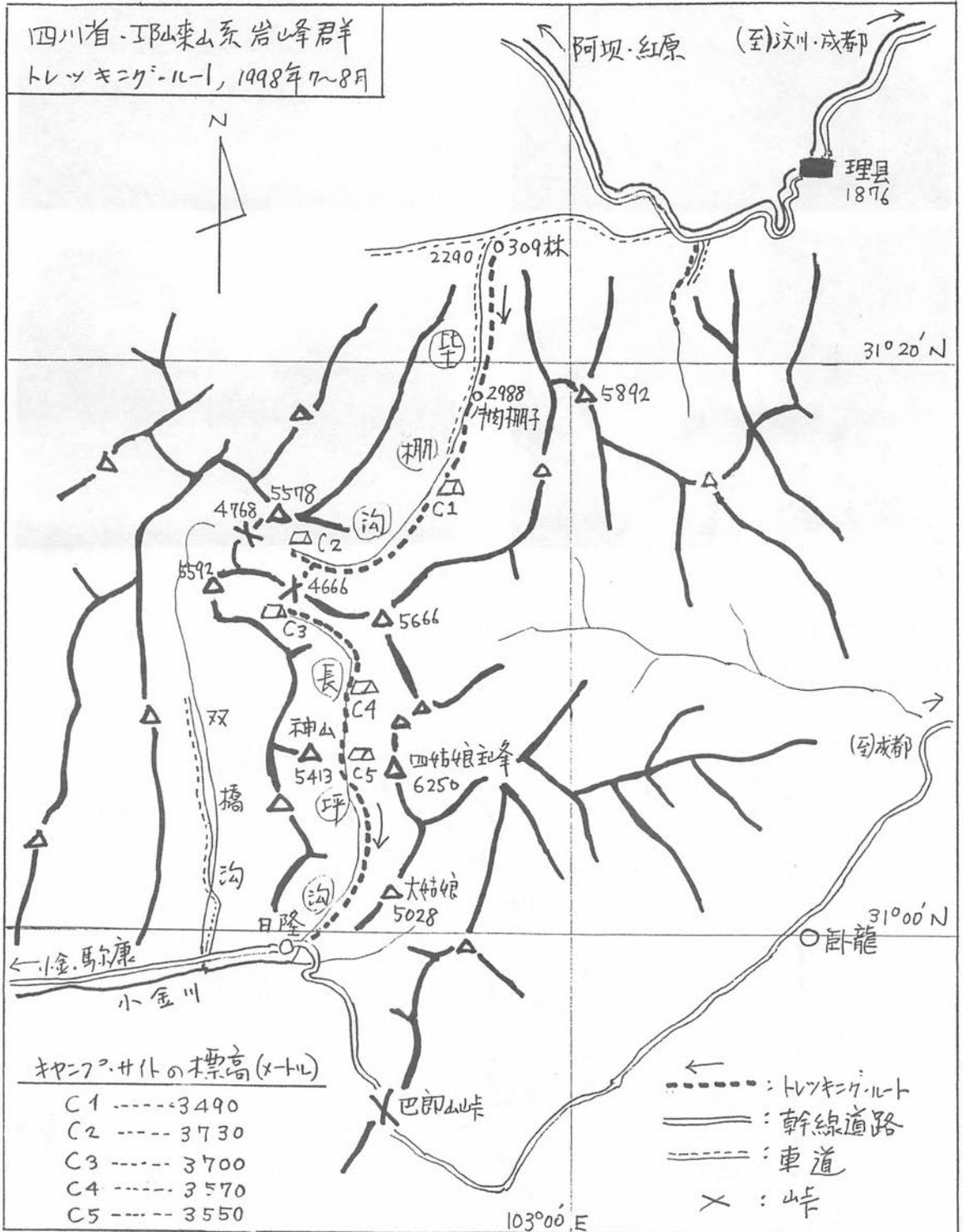
合計

\$ 3136

値引き

△ 136

* 装備にはテント3張り、炊事用具(プロパンガス、圧力釜他)など一切を含む。



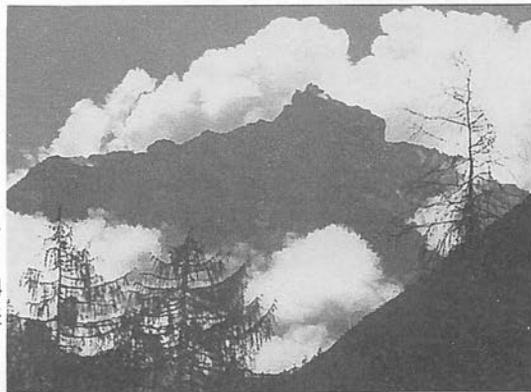
▼No. 1 5455 m 峰



▼No. 2 5178 m 峰



◀ No. 3
5500
m 峰



▶ No. 4
5524
m 峰



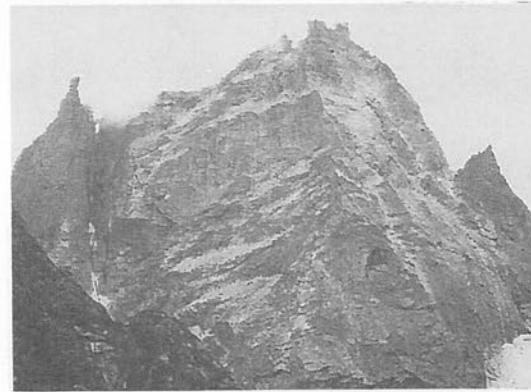
◀ No. 7
5202
m 峰



▶ No. 8
5200
m 峰



▲No. 9 5260 m 峰

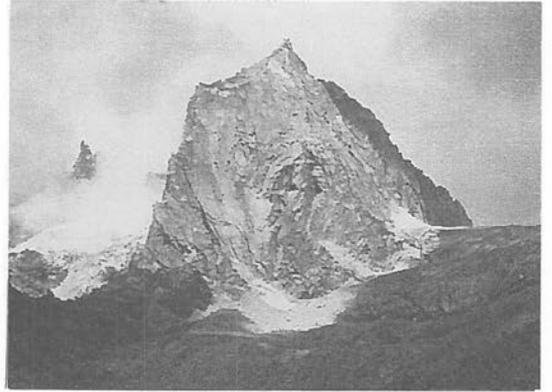


▲No.10 5404 m 峰

▼No.11 5578m峰



▼No.12 5513m峰



◀ No.14
5488
m峰



▶ No.15
5422
m峰

5466
m峰



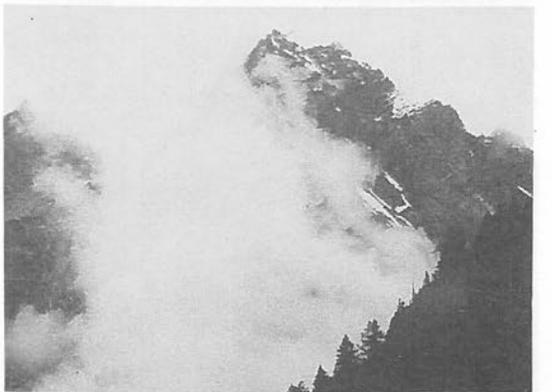
◀ No.16
5672
m峰



▶ No.17
5461
m峰



▲No.21 5465m峰



▲No.20 5583m峰

HAJサマー・キャンプ

四川の夏 ラモ・シェ(6,070m)登山報告

— 雨音と落石音を聞きながら、敗退の記録 —

はじめに

「四川省の西部稻城県に海子山という名所があります。古寺と湖沼の多い知られざる地域で、5000m峰の登山とトレッキングを楽しむことができます。」

本隊は最初はこんな文章に惹かれて立候補してきた隊員によって組織された隊であった。しかし、最初の集まりで、酒井隊長より、夏期にピッケルやアイゼンを使用しての登山の対象となるような山は目的地にはないとこのことで、山森氏の勧めもあり、名峰ミニヤ・コンカの北方に位置する田海子山＝ラモ・シェを目的地とすることとした。

ラモ・シェはミニヤ・コンカ連山と谷を挟んで北東に位置する山塊の主峰であり、この山塊には6000m級の山がいくつか連なり、広域的には横断山脈に属する。最初の段階では、遠方より撮影された山塊の写真が少数あるのみで、どの山体がラモ・シェなのかはっきりと確定できない未知の地域であった。目的地がかわったことにより、続けて隊員を募集することとなり、最終的に9名の隊が組織された。出発前になって、アメリカ隊と中村保氏の撮影した写真、ロシア及び中国製の地図が手に入り、一定の情報を持って、旅立ちの日を迎えることができた。

C1入りする日、青空の下、仰ぎ見たラモ・シェは山頂直下に5つの神(5つの岩峰)を有し、美しく神々しく、山頂へと続く雪稜は強く登高欲をそそるものであった。しかし、今遠征は雪に触れることなく、というより登山靴を履くことすらなく終了した。

今遠征では、日本を立つ前からふたつのことが心配された。

ひとつは、長江下流などの大洪水の報道に見ら

れたように、大雨への危惧であった。もともと雨期での遠征であるため、天候に恵まれないことはある程度は覚悟していたものの、今年の雨は特に心配であった(状況によっては、他の山に転進することも頭の片隅に置いていた)。

ひとつは、中村氏やアメリカ隊の写真からは、稜線に出るコル直下がかなり切り立っている様子が窺え、コルの下部はどうなっているのか、コルへのルートが意外と難しいのではないかという危惧であった。

結果として、このふたつの心配は現実のものとなり、4900m弱で、登山期間を大幅に残して下山となってしまった。しかし、色々な条件が心配される中、皆元気にBC入りでき、1名を除き、ラモ・シェの汚れなき白き山頂と5つの神を仰ぎ見れたことは幸いというべきであろう。

四川省の省都成都からわずか3、4日で入山できる位置に、緑美しい谷、百花咲く高原、ヤクや馬の遊ぶ池を配し、前衛の門のように切り立った岩稜の奥に「女神の山」ーラモ・シェは座している。その姿は、地元の人ならずとも、登山家にとって十分に信仰の対象と成り得る山体である。何時かまた訪れ、その山頂から眼下に5つの神を眺めたいとの思いを強くし、帰国した。

以下は、23日間に及ぶ登山の概要報告である。

緑美しき村へ

8月1日 成田ー北京

12時、9名元気に顔を揃える。夏休みに入っている土曜日、混雑を予想していたが意外とすいている。14時55分、定刻通り、CA926便はテークオフ。朝鮮上空通過により以前より1時間短縮され、あっという間の感の北京到着であった。中国登山協会の趙建軍氏らの出迎えを受け、前門飯店へと

入る。ホテル界限はちょうど夕暮れ時の賑わいで、いつもながら人々の発するエネルギーに圧倒される。夕食後、何人かで散策に出る。じめじめするがさほど暑くはない。隊長部屋での一杯の後、明日以降の好天を祈りつつ、床に就く。

8月2日 北京-成都

7時半出発、高速道路のおかげで、以前みたいな早朝の出発ではなく楽である。9時45分、少し遅れて西南航空4106便にて成都へ、上空は雲の大海が広がる。成都では王華山連絡官、胡先通訳の出迎えを受ける。胡通訳は年若い女性であり、安藤隊員の目が輝く。「省都だけあって流石に大きな町ですね」などの声がかかる中、博物館の食堂博雅園に着く。朝食に機内食と食べ続けなのに、次から次へと出てくる美食に皆良く食べ、良く飲む。ゆっくりとした昼食の後、西藏飯店へと入る。休息後、登山協会事務所にアナカンでの荷物の確認に出向き、帰りがけに2年前にできたという伊藤洋貨堂に寄って缶ビールなどの買い出しを行う。店内は品物が豊富で、日曜日ということもあって、凄い人込みでごった返していた。

夜は、陳麻婆豆腐にて登山協会による歓迎会が開かれ、美食に楽しい一時を過ごすことができた。

8月3日 成都-雅安

朝食後、安藤、谷田川は登山協会事務所へと出向き、荷物の最終確認、詰込みを行う。その間、他の隊員はホテルにて自由時間。朝の成都は相変わらずの凄い自転車の波だ。正午前、事務所にて全隊員合流、昼食後、マイクロ1台、トラック1台で出発をする。有料道路を東へと向かう。郊外に出ると、稲穂の緑が美しい。この辺りは1年に3回米が出来、もうすぐ収穫の時期らしい。邛崃の先で道を間違い、工事中の道路を走ってしまい、小さなトラブルがあるが、16時半、無事雅安の町に入る。青衣江を真ん中に情緒のある町であるが、近代的なビルがだいぶ増えたようである。夕食後、何人かで町を一周し、露店で帽子やサンダルを購入する。露店は女性の下着を扱う店が多く、おしゃれが段々と進行しているようだ。出発前に見た1970年代の写真とは隔世の感がある。交通事情といい、訪れる度に中国は変化していく。

8月4日 雅安-康定

8時、茶の産地雅安を後にする。雨が心配されるので、二郎山越えを中止、石棉経由で康定をめざし、南下する。崇慶は陶器の町であり、県内に岩石採掘場や炭田が目立つ。この場所ではないが、昨年読んだ『ワールド・スワン』の父親が送られた炭鉱のことをふと思い出したりする。3800mの峠で休止、峠周辺は養蜂箱が目立つ。汉源县に入り、ひまわり畑の中の道を下り、九裏鎮にて昼食を取り、南下を続ける。汉源の町で道を間違え、大渡河を下流に下ってしまい、時間をだいぶロスする。それにしても、大渡河は凄い水量だ。いくつかの歴史の重要舞台となったことが良く頷ける。石棉の大きな採掘場が見えると、石棉の町である。ここで大渡河は流れを変える。その流れに沿い、北上する。石棉から少しの所に太平天国の史跡安顺場渡口があるが、少し離れているためか、特に標識などはなかった。大渡河沿いの雄大な風景が続くが、流石に皆少し疲れたのか、バスの中は静かである。17時15分、二郎山道の合流点で休憩、二郎山道を走っている車の影は見えない。やはり、石棉経由にして正解であったのだろうか。途中、暮色の長征ゆかりの濾定橋を見て、21時20分、康定の招待所に入る。皆疲れた様子だが、夕食に出た松茸に意気が上がり、隊長部屋で盛り上がる。明日はいよいよ登山口だ。

8月5日 康定-老榆林

老榆林とは何ともいい響きである。どのようなところか楽しみである。王さんが入山の手続きにいつの間、隊員は日本への葉書を書いたり、胡さんの案内で町を散策したりする。散策組はまず招待所のすぐ前にあるラマ教の寺院を訪れる。マ



▲多吉宅にて

ニ車や壁画などにチベット圏にやってきたことを感じる。康定は東チベットの入口である。しかし、段々と漢化が進展しているのか、以前に比べ、民族衣装の人は減ったように思う。それにしても街中を流れる川の水量は凄いものだ。その激流に沿って町の中心部を一周する。10時半、老榆林目指して出発、暫く走って激流沿いの悪路に入る。この沢はミニヤ・コンカ北部から流れくるものだ。11時半、老榆林の入口に着く。温泉を利用したことなのだろう、ヤク毛の大きな紡績工場がある。ここには外部の人も利用できる温泉があるという(帰途、我々はここで一汗流すことになる)。少し離れた場所には別に山荘もあった。バスはこんな狭い所を通れるのかといった細い道を進んで行く。12時、老榆林の村落に到着、民宿があるというので、天候や今後の行動を考えて、そこに宿泊することとなる。村人が見守る中、隊荷を少し上にある民宿に運び上げるが、3050m、少し息が切れる。民宿は普通の民家で、主人は多吉さんといい、80年代前半からこの辺を訪れるトレッキング隊や登山隊の世話をしているという。ちょっと小太りの人の良さそうな男である。コックの李さんが作ったラーメンの昼食の後、8名はBCへの道の3200m余位までを往復する。道路脇にはナデシコやフウソウ、ヤナギランなどが咲き、上から眺める老榆林の村は一幅の絵になり、ふと桃源郷という言葉が思い出す。各隊員から「なかなかいい所ですわ」との声が上がる。途中、硫黄臭い所が有り、この辺りが源泉地帯であることを感じる。多吉さん宅に戻り、李さんの美食で夕食。しかし、脂っこい中華料理の連続にか、何人かお腹をこわす者



▲老榆林よりミニヤ・コンカ連山北方の山々

▼緑美しき老榆林の村



が現れ始める。それでも、無事登山口に到着できたことで、2階の大部屋で隊員一同盛り上がる。

8月6日 老榆林滞在

BC入りのために6時起床、しかし天気は雨、しかも雨による路肩崩れにより、遠方より来る馬が12時過ぎにならないと来れないとのこと。王さんは、午後出発して白海子辺りで一泊して、明日BC入りしようというが、撤収のことなどを考えて、老榆林にもう一泊することにする。天気も悪いため、思い思いに過ごす。10時半過ぎ、馬が10頭程やってくるが、大プラパールは運びにくいとのことで、荷造をし直す。昼頃雨が上がり、南方に切り立った山が見える。ミニヤ・コンカ連山の北端の山々である。東方にも切り立った山が見られ、その後に白銀の山が見える・ラモ・シェの北に連なる蛇海子山辺りであろうか。青空が少しずつ広がりゆく中、午後は思い思いに過ごす。何人かはタオル片手に川端にあるという温泉(露天風呂)を見に行く。しかし、ヤクの糞などの汚物が浮かび、王さん以外はタオルを濡らさずに帰ってくる。馬の鈴の音が響く中、時は静かにゆっくりと流れていく。多吉さんからいくつかの話を聞く。老榆林の村はチベット語ではリャンロークーと呼び、漢語でも老榆林というのは新しい呼称で、古くは上房子と呼び、意味は一番古い所という。いつからかは分からぬが、温泉があり、水が豊かなこの村はだいぶ昔より人が居住してきたのかもしれない。冬でも雪は少なく、平均30cm程度で、40代の多吉さんでも1mの積雪を見たことは今までに2回しかないという。最近では漢族の生産隊が増加し、チベット族の生産隊はこの辺りでひとつし

かないという。老榆林の入口は300人程で、小学校があるが漢語で教えているという。村人はチベット仏教（ラマ教）の信者であるが、村にはラマ僧はおらず、何かあると、康定近くから僧を呼ぶという。ラマ僧にも定年があり、60才だという。ラマ僧に定年があることを今回初めて知った。村にはマニ車の堂があるが、寺院はなく、村より上部にも寺院はないという。生活の大半は谷あいを利用した畑で、ジャガイモ、ツォンパが主食であったが、現在はそれらを米に交換することが多いという。ラモ・シェはチベット語ではチャリ・チャガといい、いくつかの言い方があるが、現在、一般的には渾海子の山、五个神山（5つの神の山）という呼び方をするという。5つの神の山というのは、山頂直下に顕著な5つの岩峰があり、山頂に近い方からひとつずつラマの高僧の名が付けられていることによるという。しかし、5つの岩峰にラマ僧が宿っていたのは昔の話で、理由ははっきりとは聞き出せなかったが、何処かに飛んでいってしまい、現在はいないという。この話をもっと聞きたかったが、多吉さんの表情がどことなく寂しそうだったので、登山の話聞く。この谷には良くトレッキング隊がやってくるという。その多くはイギリス人とアメリカ人で、雪門坎の峠越え



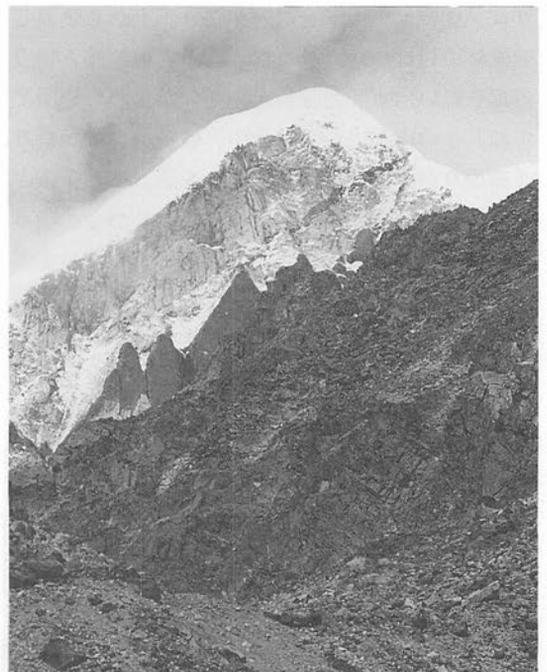
▲C1への荷上げ

（老榆林南東にある3948mの峠）や海子（湖）巡り、盤盤山（老榆林南西にある4648mの峠）のコースが多いという。最近、アメリカ人がラモ・シェ連山のひとつに登頂したが、ラモ・シェではないという。明日、5つの神を眺められることを楽しみにして床に就く。老榆林に2泊したことは、結果としては休養及び高所順応にもなり、良かったといえるが、何人かはダニのひどい害を受けることになる。

5つの神の懐にて

8月7日 老榆林-B C

6時起床、いよいよBC入りである。心配された天候は何とか良さそうである。7時40分、安藤、谷田川を除く先発隊が出発。多吉宅より、全員順調に登っていくのが見える。9時、隊荷を全部積んだことを確認して、馬と一緒に安藤と谷田川は出発、1時間も登ると南北に走る立派な道に出る。足下の谷の緑が美しい。流石に馬と馬方の足は速い。隊長と無線連絡を取る。先発隊から馬が見えるという。暫く立派な道を歩いて、沢を渡り、良く踏まれた道を行く。11時、吊海子で休憩している先発隊が見える。吊海子は緑の中にできた小さな笑窪のようで、日本の山の尾根の平坦地で見掛



▲ラモ・シェ中腹の五个神山



▲山頂直下に五つの神（岩峰）を有するラモ・シェ（田海子山）六〇七〇m

ける小さな池と感じが良く似ている。吊海子の手前辺りから、ヤク毛のテントやカルカ（石造りの夏小屋）がちらほらと現れるようになり、ヤクや馬などを放牧している。12時、そんなテントのひとつで休憩している先発隊に追いつき、ヤク乳をご馳走になる。ここより東にルートを取る。西方の台地の上には大きな湖があるが、霧で見えないことが多いという。この地域の夏期の天候はもともと不順なのかもしれない。大きな石の散在する高原状の道を行き、13時前、渾海子に到着する。ラモ・シェからの沢が流れ込んでいる湖で、氷河からの水のせいか色が白濁している。岸边ではヤクが遊んでおり、水深はさほど深くなさそうである。湖の左岸をたどり、花の綺麗な道を左からの尾根を巻き込み、氷河からのモレーンの末端が壁状となっている下の草地をBCとする。BC着、14時40分～15時、標高4300m、草地の間を小さな沢が流れ、眼下には渾海子、そしてその向こうにミニヤ・コンカ連山北方の山々が眺められるいい場所である。17時、BC開きをするが、その前より激しい雨となる。テントを叩く雨音を聞きながら、隊長、副隊長、谷田川、吉田、安藤は遅くまで盛り上がる。明日は、隊長、副隊長、吉田、安

藤で上部（C1）偵察、他は谷田川を中心にBCの整備、上部へ上げる荷物の整理をすることとなる。それにしても良く降る。歓迎の雨と思い、痒い寝袋に入る。

8月8日 BC-上部偵察、BC滞在

7時起床、雨が降り続けている。朝食後、まず個装を整理することとする。小降りになったのを見計らい、10時半に偵察隊が出発する。直上は落石の危険があるので、左をトラバース気味に登り、40分程で壁の上部に着く。13時の交信、ホワイトアウトで視界が悪いが、幾筋にも複雑に波打っているモレーンの左寄りに綺麗な尾根状の1本があり、踏み跡も付いており、そこを通り、現在、前方に氷河が微かに見える地点に達しているという。15時の交信、尾根状の先端から先はだいぶ悪そうだった。大きな浮き石がごろごろする中、手探り状態でルートを進め、14時20分約4700mで下山開始、C1適地は見つからないとのこと。16時10分、BCに帰着する。BC滞在班は谷田川を除き午前中は休養とする。谷田川は共同装備の確認、上部に上げる荷物の区分けをする。昼食の後、三宅が食料、男子3名でテントの確認、フィクスロープの切断などを行う。

8月9日 BC-上部偵察

7時起床、西方の山々が新雪を付け美しく見える。晴天になることを祈って、9時、副隊長、谷田川、安藤の偵察隊が出発、ガスが出てくるが、昨日よりは視界が効くとのことでゆっくりと歩を進める。10時40分、尾根状の先端に到着、それから先、足場の悪い中を赤布を立てながら行く。昨日、隊長が話をしていたように確かに凄いモレーンである。大小の岩が複雑に波打っている。同行した王連絡官も「こんな地形は珍しい。ミニヤ・コンカにも似たような所があるが」という。特に大きな岩の上部に達し、先に進もうとすると、ちょうど尾根状の末端に到着した隊長の命により、「無線」という吉田の大きな声が聞こえる。副隊長が無線をオープンにすると、「ここから見る限りC1を設置できそうな場所はその大きな岩の周辺しかない。下に降りてテントを張れる場所がないかどうかを確認して下さい。」とのこと。上から見る限りはスペースが少なく、落石の危険も多いように思われる。ガスが少し晴れ、上部の氷河が少し見えていることもあり、副隊長が大岩へ下り、谷田川、安藤はC1適地も含め、もう少し上部への偵察を続けることとする。少しでも視界のある時に、コルへの手掛かりを掴みたいとの思いでの行動であったが、これが隊長に大きな心配を掛けることとなってしまった。副隊長は大岩の近くにかろうじてテント一張りを張れるスペースを見付け、谷田川は約4900mに達するが、視界が悪くなったため、3名合流してBCへと下山する。途中より雨、この日は他の隊員も尾根状の先端までを往復する。それにしてもよく降る。テントを



▲BC上部より西側の新雪の山々を望む

▼尾根状ルートより田海子山



叩く雨音に、何人かは自棄気味に杯を重ねる。深夜、星が見える。

8月10日 BC-C1、BC滞在

7時起床、待ちに待った晴天だ。西方の山々が美しく、白海子山もその白い頂を少し覗かせている。朝食後、ポーター6名が出発、10時前後遅れて副隊長、吉田、谷田川、安藤が出発する。今日はこの4名がC1入りする。少し荷が重たいのでやや息苦しいが、順調にモレーン末端に到着する。ガスが晴れ、青空の下、ラモ・シェがその美しい姿をようやく見せてくれた。山頂直下の5つの神々は何ともいえぬ色をしており、時が経つのを忘れて見とれてしまう。遅れてここまでの予定で登ってきた牧、菅沼も到着する。美しいラモ・シェを前方に眺めつつ荷の重いポーター達と尾根の道に行く。しかし、コルへのルートは手厳しそうだ。下部に大きなクレバスが端から端へと横断し、その上部はかなりの傾斜の急壁で、至る所に縦横にクレバスが走っている。また、氷河上には多くの落石と流雪の筋が描かれている。しかも、白海子山側からの雪崩や落石が目立つ。12時50分C1着。休憩している際に白海子中腹にかかったブロックが崩壊し、長い落石が続き、昨日谷田川、安藤が歩いた所まで達する。晴天で雪や石の緩んだせいだが、ひやっとする。14時15分、整地してC1設営、6人用天幕がようやく1張り張れるスペースだが、思ったより快適、落石の危険もまもなく、近くには水も流れている。天気の良い内に上部への偵察に出ようかとも考えるが、谷田川以外は4日連続で動いているので、午後は休養とする。白海子からは落石音が続き、それに混じって時々

モ・シェ側からも落石音が聞こえる。見れば見る程コルへのルートは難しそうだが、明日は早い時間の内にともかく行ける所まで行ってみようとのことで、BCに追加のスノーバーなどを上げてもらうように頼む。20時の交信の後、することもなく寝袋に入る。夜半、稲光が走り、激しい雨となる。落石音も絶え間なく響く。

8月11日 C1及びBC停滞

昨夜から激しい雨、7時の交信で今日はC1もBCも停滞することとする。C1の4名で今後のことを検討する。まず、①天候が不順で晴天が続くことは期待できない②登頂を考えた場合に残り日数が少なすぎる③コルまでを目標にすることも考えられるがその割には危険のリスクが多すぎる④下部クレバスは何とか越えられる所を見付けられそうだが、上部のルートフアンティングが難しい。ルートが確定できたとしてもスピーディーで確実な登攀技術が必要とされ、今回の隊員にはそれだけの力量はない⑤仮にコルまでルートを開くことができたとしても、下りのルートが確保されている可能性は低い⑥氷河末端までにも落石やラモ・シェ中腹のブロック崩壊などの危険要素が多い⑦悪天候続きで成都への帰路が心配される⑧今日一日行動できないことの意味は大きい—こうしたことから明日C1を撤収することを考え、9時の交信で副隊長が隊長に伝える。隊長も了承し、今後のことは王さんと協議するとのこと。雨は一時やんだだけで降り続く。C1の4名はすること



▲稜線（コル）直下の氷河

もなく、朝食以外は寝て過ごす。午後の交信で、明日12時にポーターが登ってくること、13日はBC滞在、撤収準備、14日一挙に康定に下ることを確認する。朝より上部は雪で肌寒い。

8月12日 C1-BC、BC滞在

6時起床、雨、ガスも深い。のんびりと朝食を取り、小雨の中、撤収の準備をする。11時10分、上部より掛け声がしたかと思うと、ポーター達が駆け足で降りてきた。大きな岩の影で共にスナック菓子を食べた後、深いガスの中を下山する。何時覚えたのか、ポーター達が休憩を取る際に発する「いっぼん、いっぼん」の音が愛敬がある。モレーンの末端部に付くと、ラモ・シェを見たいとの思いで高橋さんがひとりで登ってきていた。天気は回復する見込みはないので、一緒に下山する。途中、ポーターのひとりがなき兔を掴まえる。13時45分、BC着、また雨が本降りとなる。渾海子へと流れ込む沢の水量もだいぶ増えたようだ。

8月13日 BC滞在

のんびりと起きる。今日もあまり天候は良くない。雨が降らない内にと撤収の準備をする。馬が上がってきて、周辺で草を食んでいる。そんなのかな風景を見ながら、午後は思い思いに過ごす。段々と青空が覗いてきて、夕方、BC上部よりラモ・シェが眺められる。ちょうど5つの神々までが見え、1名を除き全隊員がその姿に接することができた。ラモ・シェの神々は最後にまた微笑んでくれたようである。下から上がってきた多吉さんなどを交え、日本酒を開けて撤収式を行う。その後、李さんの心尽しの料理を前に日中の歌合戦を行う。5000mに達することもできなかったが、今回も楽しい隊員に恵まれ、地元の人々と楽しい一時を持つことができた。我々の張り上げるダミ声に、山の神々が怒ったのか、夜半よりまた激しい雷雨となる。雨の中の撤収を考えると気が重い。酒はまだある。隊長、谷田川、安藤は12時過ぎまでこんこんとやる。色々な想いが胸をよぎる。

8月14日 BC-康定

6時起床、直前まで激しい風雨が続けていたが、何とか降りやむ。9時、谷田川、

▼渾海子めざしてBCを後にする

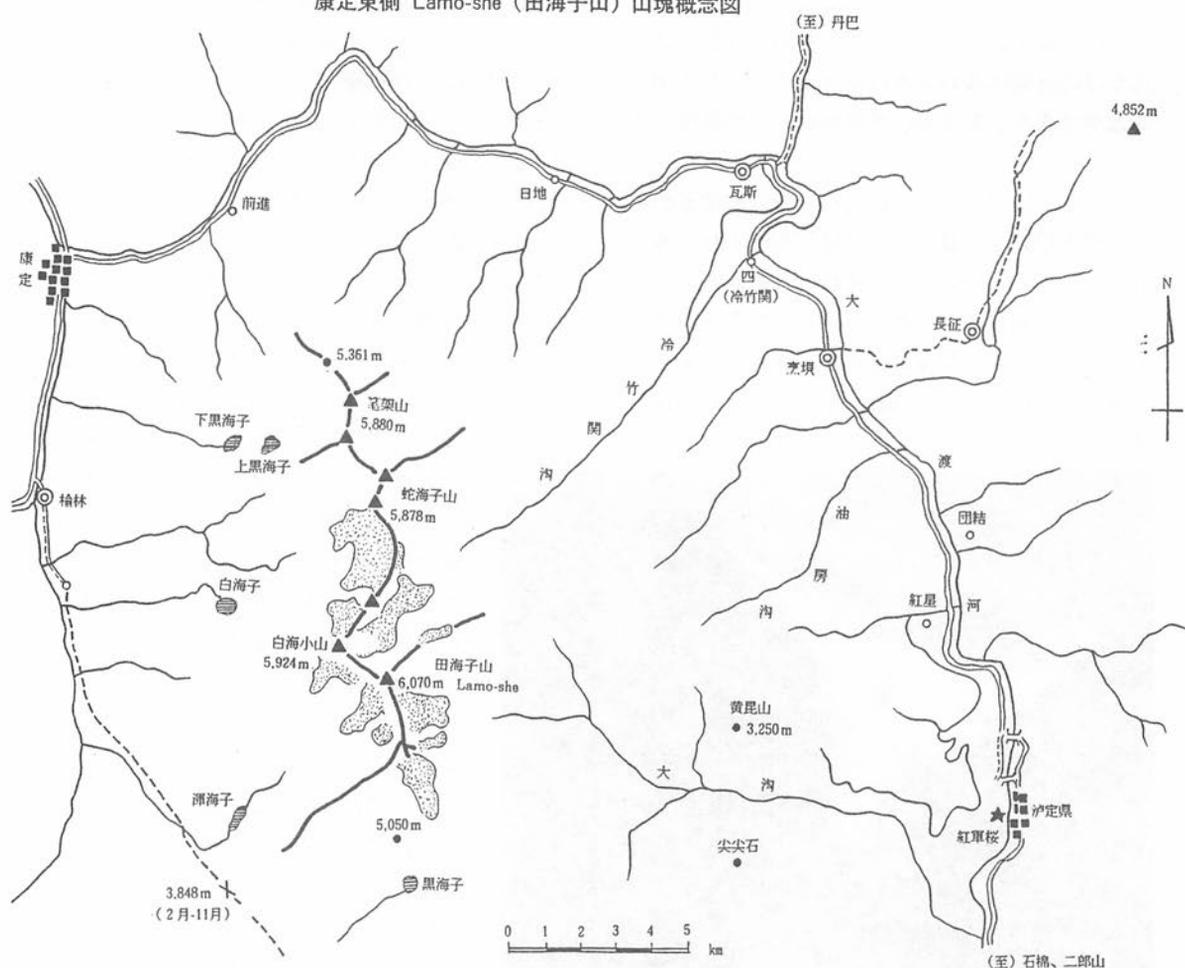


安藤を残し下山する。物を燃やすと雨が降ると多吉さんがいうので、生ゴミ以外は全て下ろすこととする。1頭の馬が暴れてなかなか荷物が積めない。だいぶ時間が掛かって、10時、全ての隊荷を積むのを確認して谷田川、安藤は下山を開始する。

結局1頭の馬に積みなかった荷物を多吉さん達が背負って下りることとなる。渾海子への道は沢の水が増水して歩きにくい。馬も難儀をしているようだ。11時15分、渾海子より少し下った所にあるヤクのテントで隊長らと合流、ラモ・シェは見えないが、コル直下の水河は見える。隊長が「ありゃあ水瀑だな」と呟く。増水した沢を渡り、12時半吊海子着、30分の休憩後、思い思いに下る。14時半前後、多吉さん宅着、荷物を梱包し直し、チャーターした路線バスが到着するのを待つ。年期の入ったバスの屋根上に隊荷を高々と積み、多吉宅を後にする。16時15分、紡績工場の温泉着、個室式の石風呂に入り、10日ぶりのアカを流す。18時康定着、夕食後、全員で町を散策する。

(記・谷田川 武)

康定東側 Lamo-she (田海子山) 山塊概念図



「ヒマラヤ276号」より転載

名所をめぐりて

8月15日 康定滞在

車の手配待ちで一日康定に停滞する。8:00起床。8:30西楼にて朝食。食欲なく、ホットミルク、饅頭、白粥だけを食す。午前中は自由時間。ひと休みしてから、康定の町中を散策するつもりが、次第に体調不良となる。そのまま、昼過ぎまで、横になる。12:30曇り空の中、昼食のため全員で町中の食堂に出かける。四川省登山協会の康定地域の連絡官だった付律さんが同席。日本の登山隊をいくつも案内したとのこと。酒強し。一人一人と乾杯の応酬。特に、安藤隊員とは何回も繰り返す。食後、散歩がてら雑貨市場から野菜市場へとまわり松茸を購入。1kg15元。途中から雨が強く降り出す。傘をもたない5人は4人乗りの三輪車にてホテルまで戻る。18:30ホテル横の小さな食堂を借り切り、電気コンロではあるが、焼き松茸食べ放題。隊長の腕冴える。四川料理づけの中、焼き松茸、焼きナス、焼きジャガイモで食がすむ。

8月16日 康定-峨眉山

6:00まだ暗い康定賓館前を出発。曇天の中、一路、峨眉山を目指す。バスは康定-成都の定期バスをチャーターしたもの。激流沿いの道を30分程下ったところで、落石のため10分ほど停車。7:45二郎山への分岐点に到着。今回は二郎山峠越えとなる。時間による通行制限のためかすれ違う車はほとんどない。晴れていれば、貢嘎山(7556m)が見えるとのこと。峠を越え集落に入ると、雲一つない青空の下、山上までとうもろこし畑が覆う。天全まで下ると稲田が広がり、収穫間近を思わせる田の色である。町中を抜け15分ほど走ったところで、工事のため2時間停車する。ここ四川省は、今、国道整備のため至る所で工事中のようだ。4、5年後には二郎山の峠にトンネルが開通すること。夏の日差しの中、じっと待つ。物売りがバスの周りにどっと集まる。不要を連発するがなかなか去らない。車の横の民家で繰り広げられる日常生活が舞台劇のように感じられる。14時55雅安到着。町の食堂にて昼食。1時間ほどで出発。夾江までの道の両側には穀倉地帯が広がる。稲刈り

▼峨眉山、金頂



が始まっており、道の端には筵にひろげられたとうもろこしや芻が見られる。どこか日本の農村風景に似ているように感じる。山間いの水田地帯は似てくるのであろうか。18:45峨眉山のふもと紅珠山賓館に到着。このホテルの前身は蔣介石の別荘だったとのこと。外観、設備ともに整い現代的なホテルであったが、日本円の両替は断られた。円安の影響であろう。この日の夕食も参道脇の小吃を借り切り、七輪に炭を熾し、松茸の塩焼きを食す。何かとまわりの店の人々が寄ってくる。

8月17日 峨眉山滞在

8:00出発。今日一日峨眉山(3099m)巡りである。9:30駐車場着。登りはロープウェイを利用。山上で日の出を迎えたと思われる人たちの下山でロープウェイまでの道はごった返す。狭い道にみやげ物店が軒を並べ、途中餌をねだるサル群もいてにぎやかである。ロープウェイの駅前には駕籠かきが多勢いて客引きが盛ん。駕籠は無蓋である。駐車場から40分程で、山頂に到着。トイレは有料2角。公衆トイレはどこも2角のようだ。下界は晴れていたが、頂上はガスに包まれていた。時折、ガスが晴れることもあるが、遠望はきかない。山頂は広く、寺の建物がいくつかあり、金頂には重層をなす寺院が建っている。ゆっくりと一回りした後、歩いて下山する。視界もきかず単調で急な階段がつづく。12:30駐車場を出発、途中で昼食。柔らかい豆腐とタケノコの料理がこの辺の名物料理なのだろうか。14:30中腹にある万年寺を拝観。駐車場から寺までロープウェイで往復。普賢菩薩騎象銅像や丸窓の建物など中国を感じさせる寺院である。16:30ホテルの近くにある報国

寺を拝観。19:00夕食は昨日と同じ店で、焼き松茸を中心にとる。締めはこの店特製ラーメンを食す。なかなか旨い。みやげ物屋を冷やかしながら帰館。

8月18日 峨眉山-楽山

8:30出発。10:20楽山大仏の駐車場着。案内しようという人にしばしつきまとわれる。71mの磨崖仏。観光客が多く、階段は列をなす。気温・湿度ともに高い中、大仏の足下まで降る時は汗をかかずに済んだが、登り返しで、汗びっしょりとなった。もともと川岸にあるためか、湿気が異常に高い。大仏見学の遊覧船に乗船。船客のほとんどは外国人客で占められていた。すぐ近くの食堂にて昼食をとる。川魚料理が名物とのこと。14:30女神賓館にチェックイン。市街地からやや離れた高台にある丸い建物。この後、夕食まで休憩。

こうして、あっという間に23日間の遠征が終了。登頂できなかったことは残念だが、中国の山、自然、民族、生活の一部を垣間見ることができた。機会があれば、また、挑戦したいと思う。

(記:吉田 和宏)

◎隊の名称

日本ヒマラヤ協会ラモ・シェ登山隊

◎隊の構成

- 隊長 酒井 國光 (59) 茨城
- 副隊長 山岸 和男 (53) 神奈川
- 秘書長 谷田川 武 (44) 東京
- 隊員 高羽 秀徳 (68) 千葉
- ” 高橋富貴夫 (62) 東京
- ” 吉田 和宏 (44) 埼玉
- ” 三宅 愛弓 (41) 東京
- ” 牧 久真子 (40) 静岡
- ” 安藤 斎 (39) 福島
- 連絡館 王 華山 (41)
- 通訳 胡 先

◎報告書

本遠征については来春詳細な報告書を発行する予定である。

山の情報誌「岳人」



毎月15日発売 (日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

98年	特集
★ 1月号	ぼくの好きな雪の山小屋で粉雪わけて爽快山スキー
2月号	
★ 3月号	駅から登るとっておきの山新緑と残雪を求めて5月の山
4月号	
★ 5月号	山の本、名作をめぐる春山紀行
6月号	
★ 7月号	夏は北海道の花と溪流へ
8月号	
9月号	真夏に涼を求めて、高原へ
★10月号	
11月号	初秋の単独行の山歩き
12月号	
	上信越の紅葉をさぐる
	名峰を訪ね、冬枯れの温泉へ
	冬山入門、心構えと特選コース

(★は特大号となります)

東京新聞出版局 (中日新聞) 東京本社

〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

地域ニュース

《インド》

東南ラダック、ルプシュ谷 トゥージェ (6,148m) 峰 初登頂の概要

はじめに

私たち中京山岳会隊は1998年8月にトゥージェ峰(6148m)に登頂した。トゥージェ峰は、ツォ・モリリ湖の北西約40kmにあり、標高4940mのポロコンガ峠を越えた約8km西のポロコンガ・プーの谷の北側にある。

1998年の夏のラダック地方は天候不順で登山期間中の半分以上は午後から夜間にかけて雪か雨が降った。しかし、私たちは、11名の登山隊員中の9名が初登頂するという幸運に恵まれた。また、探査隊10名もレーヤツォ・モリリ湖周辺の探査を行なった。登山隊の年齢構成は、23才から66才まで分布し、平均年齢58才の高年齢登山隊であった。

ベースキャンプ (BC) 建設

ポロコンガ・プーの左岸の標高4600m地点の荒れた岩屑の斜面に8月9日にBCを建設した。主稜線から南に広がる広い谷の上部を偵察の後、5400m地点に第1キャンプ(C1)を建設した。C1から岩屑の累積する広い斜面を登り、上部の雪壁にルートを取り、標高6000mの主稜線の直下に約100mのロープを固定した。

初登頂

8月14日、第1次登頂隊の9名、沖隊長、武藤副隊長、伊藤登攀隊長、野村マネージャー、菱田隊員、浜田隊員、リエゾン・オフィサーのソラブ・N・ガンディ、ガイドのアルン・ロイ・チョウダリ、ハイ・ポーター1名が3つのザイル・パーティに分れてC1を出発した。

約3時間かかって固定ロープの末端に達し、そこからは平均傾斜60度ほどの斜面を登高した。固定ロープの終点からは岩と雪の尾根となっていたが、傾斜も緩く、30分ほどで最初のパーティが11時45分に頂上に到着した。後続の2つのパーティ

も続いて次々に1時間ほどの間に頂上に立った。

登頂者の大半はC1で小休止の後、その日のうちにBCに下った。

同日、第2次登頂隊(尾崎顧問、原田隊員、竹田隊員は、浜田隊員(二度目)、ハイ・ポーター2名がC1に入り、翌日に新雪を踏んで同じルートから登頂し、BCに下った。

梶田総隊長と土屋隊員は体調が悪く、それぞれBCとC1で待機した。

撤収・下山

BCで休後、8月18日、前日、C1に登って隊貨を整理した隊員がC1を撤収した。ゴミはすべてBCに運びおろして処分した(記; 沖 允人)

トピックス

インターネットから覗いたヒマラヤ

昨今のマスコミの紙面を見ていると、世のまっとうな人々は皆パソコンを持ち、インターネットを利用して電子メールを利用しているのが普通になったかのようなのである。現実とは違ふことはご承知のとおりであるが、今後コンピューターを利用した情報のやり取りが更に活発となっていくのは明らかなようだ。

「岩と雪」の休刊以来、海外の登山情報は大幅に減ってしまった。ヒマラヤ登山はそもそも外国の山を登る事である。したがって海外からの情報は重要な重さがある。もともと国内に3000m級の山しかなく、氷河も存在しない我国では、どうしても経験が無い分他の国の情報で補い、自分達の登山に生かしてきたのが現実である。インターネットはそれを補う手段として有効であると考え、この2年の間、自前で買ったパソコンを狭いH A J ルームに持ち込んで、素人なりにインターネットなるものの一端に触れてみた。ここで最近目に付いたホームページを紹介してみようと思う。

エベレストニュース

<http://www.everestnews.com/>

今春、このホームページ(HP)の出現にはちょっとびっくりした。今年のエベレストに登山中の隊

から毎日情報を得ての南側（ネパール）と北側（中国）両面の出来事をまとめたDaily News。更に登山隊リスト、登頂者のリストも毎日更新された。間違いも多かったが、いくつかの登山隊のHPや隊員からの電子メールをまとめたこのHPは便利この上なかった。登山関係の本の広告などもあり（スポンサー）日本では手に入りにくいものも購入可能である。登山期間終了後も、登頂者のインタビュー等を随時掲載していてよくぞここまでと思う。ただし、英語が達者でないと全部目をとおすのは困難だ。エベレストニュースの最大のメリットは、エベレスト以外のHPの紹介が充実している点で、K2登山隊のHPへも簡単にいける。公募登山隊に興味のある人も、それらのエージェントのHPにもここから行く事が出来る。この号が手元に届く頃には今秋の結果が出ている頃だ。

リスク・オンライン

<http://www.risk.ru/>

ロシアの登山界の情報発信基地の様相を呈しているのがこのHPだ。

今年ロシアからヒマラヤへ向う登山隊のリスト。昨年までのロシア人の8千m峰の複数登頂者リスト。更にはヒマラヤから帰ってこなかった者のリストまでである。私はヒマラヤのページしか見ないがスポーツライミングやコンペの情報まで登山に関連する情報が盛り沢山にそろえてあり、また少し前からの登山隊の情報が掲載されており、昨年のマカルー西壁隊のページには登攀の模様やルート図などもしっかり用意されている。ロシア人が行なった96年からのヒマラヤ登山の概要を知る事が出来る。これらは当然英語で掲載されているが、一部ロシア語だけのページもある。今春、中国側からエベレストに登ったロシア隊のアレクセンティフ夫妻の遭難の模様についても詳細に報告されている。

今春のヒマラヤでのクライミングで特出されるものとしてチャンガバン北壁がある。

<http://www.volga.ru/changa/>

はこの隊のHPで、とにかく見て頂きたい。登山

そのものの質も一級だが、HPの中身も優れたものである。写真、ルート図などキチンと整理されて成功後2ヶ月足らずで公開されている。登山の模様を紹介しよう。米国人のカルロス・ビューラー（44）を隊長と4名のロシア人の同隊は昨年の英国隊ルートの左、西壁タスカー・ボードマンルートとの間の圧倒的な北壁の真ん中を直接頂上に抜けるルートをカプセル・スタイルで登った。壁に取り付いてからはポータレッジを使っての16日間の登攀である。全33ピッチの内の13ピッチにVI級以上、その内4ピッチはVI級A4が与えられている。ルートの大部分はP・シャバリン（38）がリードした。彼等は電動ドリルも使ったが、それも途中で使えなくなり、ある時、セカンドが固定されたロープをたどっていくと、不安定なフック3つでのロープが固定されていたという。「お願いだからシャバリン、あと少し登ってアイスクリュウをあの氷にぶち込んでくれ！」と懇願したこともあったという。ハンマーを使うと落石がおこりポータレッジにいる隊員が危険にさらされる為にアイスフィフヤフックが積極的に使われ、それがスピードアップにもつながったという。

フランスではスポンサーが後援した登山隊や個人にHPを提供している。

<http://www.sport-sc.com/>

ではブロード・ピークで行方不明となったE・エスコフィエや今秋チョモランマからスノーボードでの下降を計画している隊にページを提供している。これは、登山者自身の意見がみられるわけではないが、情報への信頼性は他より高いといえるかもしれない。このページには昨年のラトックII峰西壁なども含まれている。

同種のものとしては英国のA・ヒックスが

<http://www.bluedome.com/>

にHPを持っている。

さて、現在アメリカの雑誌「クライミング」や「ロック&アシス」等を購読している方も多はずだ。それらの雑誌もHPを持っている。その中で最も充実していると思われるのがイギリスの「High Mountain Sports」である。

ハイ・マウンテンスポーツ (ハイ・マガジン)

<http://www.compulink.co.uk/highmag/>

ご存知のとおり同誌はあの「マウンテン」廃刊のあとを次いで発刊されているもので、残念な事に日本では手に入りにくい。現在も英国登山評議会 (BMC) の機関紙として発行されており、そのHPは「マウンテン」の遺産も引き継いでいる。INDEXで日本の登山者の名前を入れたら、ちゃんと掲載号を引く事が出来た。

英国登山評議会 (BMC)

<http://www.thebmc.co.uk/index.html>

BMCのHPは他のHPの情報も充実しており、過去の登山隊のリストもあり、希望すれば登山隊のレポートも手に入るようになっている (有料)。英国のヒマラヤ登山の歴史を感じさせる。山岳関係のHPも数多く紹介されている。

最後に国際山岳連盟 (UIAA) のページは

<http://www.worldsport.com/worldsport/sports/mountaineering/home.html/>

にある。今年アドレスが変わったためにアクセスできなくなった方もいるかもしれない。各国の登山規則や情報が公開されている。また、高所での医療、薬についての情報が充実している。

日本隊の中にもHPを持つ隊が現われ出している。この夏の栃木岳連のムスタグ・アタ隊

<http://www.ssctnet.or.jp/tme98>

現地からの情報が随時入って、登山の状況が分かったし、こちらからのメッセージを送る事も可能であったようだ。

東日本マナスル登山隊のHPは

[http://www.akita.isp.ntt.co.jp/www-c/outdoor/manas198.](http://www.akita.isp.ntt.co.jp/www-c/outdoor/manas198)

9/20にはアタック前の休養に入っている。

さて、わずかではあるが代表的なHPを紹介してみた。ここでひとつ断っておかなければならない事がある。インターネット上の情報の信憑性である。HPの多くははなはだいい加減で、独断と偏見に満ちている。それが、時代の最先端の

(自分には理解できない) コンピューターから出てくると、全く見知らぬ人からの情報も不用意に信頼してしまう傾向があるように思える。注意が必要である。ならば雑誌などで活字になったものを読めばいいかもしれないが、残念ながら今の日本では量が少ないし、メディアの手を経たものは、時として重要なポイントが抜け落ちてしまう事が多い。やはり、登山者の自信に近い情報が一番おもしろい。HPはそれをみる側の見識も大きく問われているのである。

現在のインターネットは大半が暇つぶしの利用が多いのではないかと思う。私なども英語力が無い上に目新しさに、つつい本来の目的を忘れて次から次へとHPを渡り歩き (ネットサーフィン) 結果として無駄に時間を費やしてしまった事があった。けれども、英語圏での情報のやり取りは、確実に電子メールに移行しつつあり、この道具はうまく使いこなせば海外の登山者と直に情報を交換できる機会を与えてくれるのだ。日本ヒマラヤ協会では残念ながら機会の能力はあっても、それにキチンとした仕事 (指示) を与えてあげる人間の能力が不足しているようだ。 (中川)

BOOKS

スキルブルム7360

「夢は白き氷河の果てに」

1997年8月20日午前1時半頃、K2 (8,611m) から南西に延びる尾根の末端、メラ峰 (6,506m) 頂上付近にあった懸垂氷河が大崩落をおこし、氷河雪崩となって流れ下った。雪崩の本流は何らの被害もおこさなかったが、それに伴う爆風がスキルブルム (7,360m) の登頂を終え、数時間後には日本に向けて帰途につくはずであった神奈川ヒマラヤンクラブ隊のBCを襲い、広島三朗隊長、永澤茂副隊長、中込清次郎登攀リーダー、菊田佳子、原田達也、土森讓隊員の6名の命を奪い、4名の重傷者を出すという、カラコルム登山史上に残る大惨事を引き起こした。この度避難事故から1年を経て、その報告書が出版された。

広島隊長以下遭難者の名前を見れば、皆ここで

紹介する必要も無いほどの高所登山の経験の持ち主であり、それぞれの立場でヒマラヤ登山を引っ張っていく立場の人達であった。

この遭難事故は二つの大きな特徴があった。それは雪崩本体により被害がもたらされたわけではなく、それに伴う爆風が悲劇を引き起こした主人公であったこと。もう一つは、ベース・キャンプという登山期間中常に人がいる可能性が一番高い場所が雪崩により壊滅したという事実である。いったい何がおこったのか、マスコミの報道ではなく、一緒に行った仲間達の報告が待ち望まれた。

今回のベース・キャンプの位置は、通常のベース・キャンプより高く、普通ならポーターが上がらないところまで目的の山に近づけている。それには広島隊長の力が大きくものをいったと聞いているが、本来なら更に上にと考えていたようだ。通常的位置にしていれば、あるいはもっと上にしていけばこの事故は防げたかもしれない。しかし、それを論議する事は無意味である。登山隊の力量を考えて、登頂のためにはベース・キャンプを通常より上にしたのであり、辺境地での登山は、日本で考えていた計画が、現地での様々な出来事により日々変更されていくのが常だからだ。それが、ヒマラヤ登山をおもしろく、また難しくしているのだ。そして、そうした事実をありのままに伝えていくのがこうした報告書の大事な使命だと思う。客観的な分析に意味はあっても、登山者が経験し、考えた事、感じた事実を活字にした方が、登山(遭難)の実像が捉えやすく、これから高所登山を行なう者たちにとって参考になる。そうした意味において、写真ページを多くし、雪崩の専門家へのインタビューなども取り入れたこの報告書は、体裁は良いが事故に至る経過、事故それ自体の記載が不十分で、全体像がつかみにくい。

今迄の報告でも巨大な氷河の崩落の前には、小さな崩落が確認されている。今回も事故の前日に比較的大きな崩落が1回と、小さな崩落が続いていたと、行動記録からは読み取れるが、どのようであったのか残念ながら細かな記載が無い。「あのとき何ができたのか」隊員座談会のなかで雪崩被害は予想可能だった。としている。その根拠は

十分に説明されていないが、それが出来なかった理由の第一に、広島隊長をはじめとするベテラン達への甘え。第2にBC撤収まで数時間であるという油断。としている。ベテラン達は何を感じていたのだろうか。

報告書の終わりには遭難した6名への追悼文が載っている。その中でも紹介されているが、この登山はチョゴリザに向う予定であったのが、インド、パキスタンの国境紛争のあおりで、スキルブルムに変更された経緯がある。亡くなった原田達也氏の言葉で、「平和な世界にならなければ、好きな山も登れない。」は、現在の両国の緊張関係を見るにつけ考えさせられる。

尚、当協会が毎年春に開催している「高所登山事故と環境対策研修会」では雪崩に関するこれらの事柄について、毎回話をしている。残念ながらH A J以外の登山隊の参加があまり見られない、是非H A J以外の方にもこの研修会を紹介していただきたい。(記：中川)

A 4 変形判 128ページ。定価3,000円
連絡先：〒259-0151 足柄上郡中井町井ノ口1267
神奈川ヒマラヤンクラブ事務局
FAX：0465-81-1089

山のスケッチブック

昨夏カラコルムのスキルブルム峰(7,360m)で遭難した原田達也氏の遺作画文集である。編集は夫人の手になる。第一章は作品に小文を書いて共同通信社から全国の二十数社に配信されたもので、昨年連載されたので各地で読まれた方も多いと思う。その時のチェックが充分でなかったためか山の標高に間違いが多い。第二章は「山と渓谷」のグラビアを飾ったもの。第三章はスキルブルムに出発する2ヶ月程前に大和市で講演したものであるが、三箇所思い違いが見られるので指摘しておきたい。第一はP120の「レイからカラコルム峠を越えてカラコルムへ」。その時の報告書「山と砂漠と子供達」で確認したところ、スリナガルからグルマルグまで入り、引き返してクドからタルンを経て国境を越えラホールに到着している。また本書P34でも「インドではスリナガ-

ルまで入り」と書いていたので完全な思い違いであろう。第二はP141で「赤松さん」が田部井さんとエベレストの頂上に立っている、と話されているが赤松さんは登頂していない。第三はP155でチョゴリザは「まだ日本人は誰も登っていませんし」と話しているが、これは微妙である。京大がチョゴリザを初登頂したと報告したが登頂したのは北東峰で、後日南西峰の方が高いことが分かった。その意味では確かに日本人はまだチョゴリザの最高点を登っていない。しかし、原田氏は本書P56で京大がチョゴリザに初登頂している日本人は誰もその頂を踏んでいない、と書いているので、これは「京大らしい」が抜けたのだろう。第四章は60歳還暦で登ったシシャパンマ中央峰の登山記録である。座右に置いて時折眺め読みたい本である。(記：山森)

A 5 181頁 3000円+税(連絡先)

〒242-0005 大和市西鶴間6-3-7 原田真知子

ナムナニ峰登頂

1998年春日本山岳会福岡支部が、中国ヒマラヤのナムナニ(7,694m)に派遣した登山隊の報告書。57歳の隊長と二人のシェルパが第三登に成功した。その隊長が7,300mのキャンプを出発して登頂し、その日の内に5,600mのBCまで降りた。ルートは初登頂隊と同じく西面のザロンマルバ氷河の左寄りに採られた。

A 4判 86頁 内カラー8頁

〒810-0075 福岡市中央区港2-5-32サンポート
ハイツ902号方 日本山岳会福岡支部

幻想のカイラス

労山事務局長の野口信彦氏が、チベットのカイラスを目指した旅行記。結局増水のため行程が遅れカイラスを見ることも出来ずに終わった。道々の出来事について、1960年代に中国に留学した体験をもとにした独特の目で紹介している。最後は「良いも悪いも、みんな併せ吞んでくれたチベット。あ～あ、チベットはなんと不思議な国なんだろう。」と結んでいる。

B 6判 133頁 1998年8月31日刊

東研出版 価格 1714円+税

ヒマラヤから

トゥジェ便り

中京山岳会インドヒマラヤ登山隊の最後の始末を終え明日(30)インドを離れます。登山の報告は事務局の方からHAJの方へ送るよう手配していますのでよろしくお願ひします。

今年のインドへの日本隊の岩手大、東京の柳さんのKR-5と私共の隊とも成功し、2つの隊の方にラダックやデリーでお会いできました。ラダックもトレッカーや観光客が増加し、いろいろと問題もあるようです。デリーではジョギンダール・シン氏、M. S. コーリー氏などと旧交を暖めました。いろいろと有難うございました。

8月29日 ニューデリーにて 沖 允人

サイバル便り

ナマステ!!

御無沙汰してます。如何お過しでしょうか?我々25日KTM発、26日スルケット着、27日キャラバンスタート。28日Dailekh、9月1日Nagma、3日Chauthaと9日間歩き続け、今グルチ峠で昼食が出来るのを待っています。

前半はものすごい湿度と雨でいやになりましたが、今は寒いぐらいで川で水をあびていた前半がなつかしく思い出されるようになりました。今日はPina泊り、明日Gumgarhiで半日レスト、Simikot着は9月10日頃の予定です。それではまた。

1998.9.4 グルチ峠にて 岩崎 洋

東京集会のお知らせ

日時	10月26日(月)午後7時～
内容	
場所	HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分) 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

未踏の頂に憧れて

カバン(6,717m)偵察計画

日本に馴染みの深いランタン・ヒマールとガネッシュ・ヒマールに挟まれた地域は、中国のチベット自治区が、あたかもヤクの舌のようにネパールに食い込んでいる場所です。そこは「ジーロン(吉隆)」と呼ばれています。

そのジーロン地域の中程に知られざる山群があります。その主峰が今回偵察の目標となっている[カバン(略邦) 6,717m] 峰です。ジーロン地域の真ん中をヤル・ツェンボ江の南の高原から流れ出たジーロン川が貫通し、ネパールに注いでいます。またジーロンに入るためには、シシャパンマの西の高原から、マ・ラ(5,234m)を越えなければなりません。この峠は4月下旬まで雪が残ります。モンスーンの雨を集めたジーロン川は濁流となり夏には川沿いの道を決壊させています。

このような地域的な事情から、登山は秋の時期に限定されることとなります。来年の本隊派遣に向けて、アプローチ事情とルートを選定のため偵察隊の派遣となりました。皆様のご支援を宜しくお願い申し上げます。

1998年9月 偵察隊々長 山森欣一

計画の概要

1. 隊の名称
日本ヒマラヤ協会カバン偵察登山隊
2. 派遣母体
日本ヒマラヤ協会
3. 目標の山
中華人民共和国チベット自治区吉隆県
カバン(6,717m)
4. 目的
*カバン峰登路とアプローチの偵察
5. 登山期間
1998年10月10日～11月4日(26日間)
6. 隊の構成
山森欣一隊長以下3名
7. 隊の事務局(留守本部を兼ねる)

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4丁目2
番7号 萬栄ビル501号
日本ヒマラヤ協会
☎(03)3988-8474 FAX 03-3988-8502
夜間:隊出発まで 山森欣一

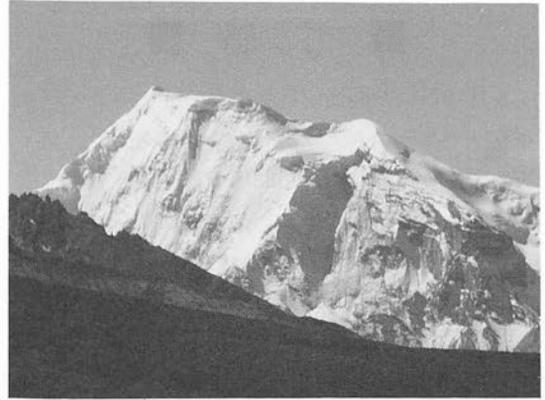
日程

- 10月10日 成田→成都(飛行機)
- 11日 北京→成都(飛行機)
- 12日 成都→ラサ(飛行機)
- 13日～14日 ラサにて出発準備
- 15日 ラサ→シガツェ(車)
- 16日 シガツェ→ティンリ(車)
- 17日 ティンリ→ジーロン(車)
- 18日 ジーロン→BC(車)
- 19日 } 偵察期間(10日間)
- 28日 }
- 29日 ジーロン→シガツェ(車)
- 30日 シガツェ→ラサ(車)
- 31日～11月1日 ラサ滞在
- 2日 ラサ→成都(飛行機)
- 3日 成都→北京(飛行機)
- 4日 北京→成田(飛行機)

隊員名簿

- 隊長: 山森欣一(Yamamori Kinichi)
- ① 1944年2月 生(54歳)
 - ② 〒134-00 東京都江戸川区
 - ③ 日本ヒマラヤ協会 ☎ 03-3988-8474
 - ④ 山嶺登高会
 - ⑤ 1975 インド、ヌン(7,135m)副隊長
 - 1978 パキスタン、ハチンダール・キッシュ
(7,163m)副隊長
 - 1980 ネパール、カンチェンジュンガ(8,586
m)偵察隊長
 - 1981 ネパール、カンチェンジュンガ隊長

- 1982 インド、クン(7,077m)隊長
- 1984 中国、ナムナニ(7,694m)偵察隊長
- 1985 中国、ギャラ・ベリ(7,294m)偵察隊長
- 1986 中国、ゲニ(6,204m)偵察隊長
- 1987 中国、ラプチュ・カン(7,367m)合同
登山隊(チベット登山協会)隊長
- 1989 中国、シャラリ(6,032m)隊長
- 1991 中国、雪宝頂(5,588m)秘書長
- 1991 中国、ミニヤ・コンカ(7,556m)隊長
- 1992 中国、ムスターグ・アタ(7,546m)隊長
- 1992 中国、クラウン(7,295m)隊長
- 1993 中国、ユイチュ(6,179m)隊長
- 1994 中国、ミニヤ・コンカ(7,566m)隊長
- 1997 中国、クーラ・カンリⅡ(7,418m)隊長



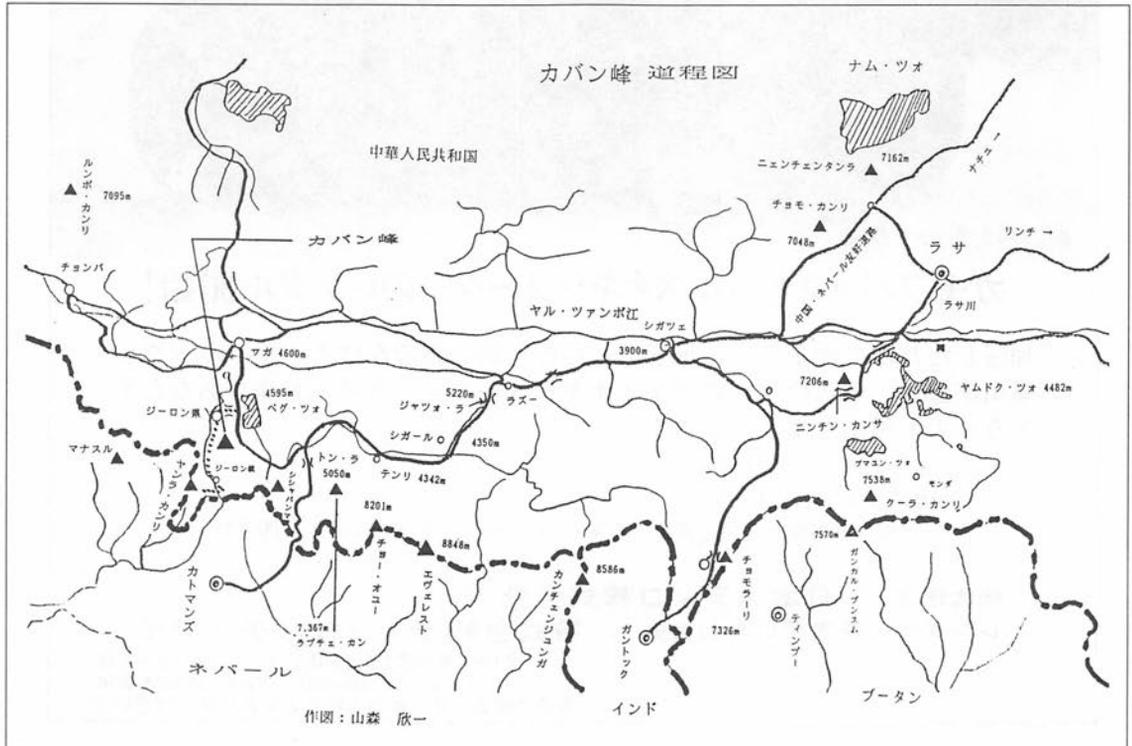
- 1996 中国、チェルー(6,168m)
- 1997 中国、クーラ・カンリⅡ(7,418m)副
隊長

隊員：太田康夫 (Ota Yasuo)

- ① 1953年 3月 生 (45歳)
- ② 〒721-09 広島県福山市
- ③ 自営 ④ 無
- ⑤ 1990 メキシコ、ポポカテペトル(5,452m)
登頂
- 1993 中国、ユイチュ(6,179m)登頂
- 1994 中国、ルンボ・カンリ(7,095m)
- 1997 中国、クーラ・カンリⅡ(7,418m)

隊員：樋上嘉秀 (Higami Yoshihide)

- ① 1944年 6月 生 (54歳)
- ② 〒537-00 大阪市東成区
- ③ 交楽荘薬店
- ④ 大阪わらじの会
- ⑤ 1993 中国、ムスターグ・アタ(7,546m)登頂
- 1994 中国、ユイチュ(6,179m)登頂
- 1995 インド、ヌン(7,135m)副隊長



■ 寸 感 ■

8月10日に共同通信社会部から「ナンガ・バルバットでルーマニア隊が3人の遺体を発見。フィルムを持ち帰ったので1983年の日本隊を教えて欲しい」との連絡が入った。その後様々な経緯を経て「3人の日本人の遺体なら84年のH A J隊の可能性もある」ことになり、遺族への連絡なども行った。共同から捨てたフィルムに写っている4人の顔写真が届けられたが、数人で見た結果H A J隊のメンバーでないと判断。しかし、写真と遺体は別かも知れず、ルーマニア隊から直接情報を仕入れるべくコンタクトしたがとれなかった。

翌朝、外務省から連絡が入り、ルーマニア隊は遺体発見のことは一切言っておらず、カラーフィルム2本を拾っただけだと分かった。ルーマニアの通信社が出したEメールに振り回されて一件落着。情報伝達の怖さを知らされた。(山森)

事務局日誌 (9月)

1日(火) CMAへカバン峰費用送金

- 9日(水) ヒマラヤ323号発送
- 10日(木) 千葉工大「ナンガ・バルバット」出版記念(麹町・山森、寺沢、中川)
- 16日(水) 1999年度登山隊資料発送(15名)
- 17日(木) カバン峰ビザ申請
- 18日(金) ボナッティ氏歓迎会(山森、尾形)
- 21日(月) 国際山岳博物館協議会(山森)
- 26日(土) アルタイ山脈説明会(於ルーム)
- 28日(月) 東京集会(24名)

ヒマラヤ No.324 (11月号)

平成10年10月10日印刷 10年11月1日発行

発行人 稲田 定重

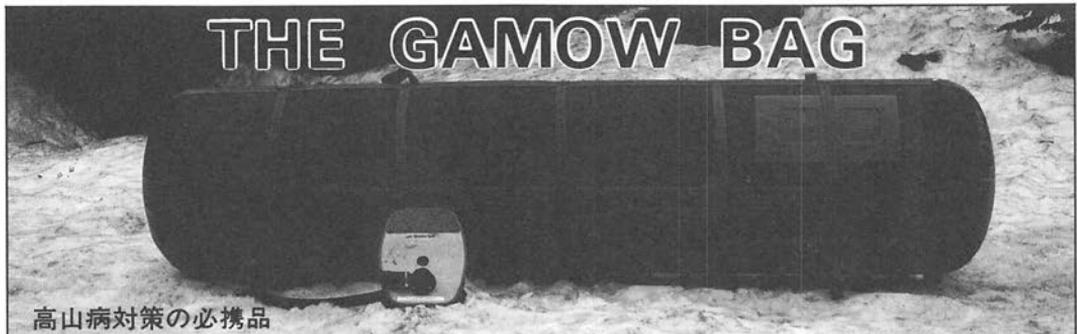
編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店 : 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL : 03-5245-0511 FAX : 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高み



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式
会社

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(64)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟プラカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004